



### 36 狐とカラス

(中国の昔ばなし)

あるとき狐は、カラスがくちばしに肉を一切れくわえて木の上にとまっているのを見かけました。

狐は木の下にすわり、カラスをほめ始めました。

「あなたの色は、まじりけのない黒です。闇を守ることを心得ていた老子の英知をお持ちです。

あなたの声は、かすれて強い。声だけで敵を退けたいにしえの王と同じ勇気をお持ちです。あなたは鳥の王様です。」

カラスはそれを聞いて大いに喜び、「どういたしまして」と言いました。

ところがその瞬間、カラスがくわえていた肉がこぼれ落ちました。

狐はその肉を下で受け止めて食べてしまった。それから狐はカラスに向かって言いました。

「おい君、覚えておきたまえ。人が理由もなく君をほめるときは、何か下心があるものさ。」

# キツネとカラスの知恵くらぶ。

ローム君の新・博物日記

第36話

## 世界昔ばなしを科学する

このシリーズは、半導体技術で世界に貢献するロームがお届けしています。おなじみの世界の昔ばなしの中から毎回テーマを一つとりあげ、そこに隠れているいろいろな不思議を科学の視点で見つめます。さて、今回のおはなしは…

おしらせ

バックナンバーは、ロームの文化支援のサイトでご覧いただけます。  
[www.rohm.co.jp](http://www.rohm.co.jp)へアクセス

### ●東西にあった、「狐とカラス」。

この昔ばなし「狐とカラス」は、中国で広く知られている話です。実は、古代ギリシアの説話集『イソップ物語』にも、そっくりの話があります。伝播したのか、全くの偶然なのか、正確なことは分かりませんが、何らかの関連があった可能性が高いそうです。ちなみに中国と日本は、類似した昔ばなしが多いのですが、この「狐とカラス」に関しては、日本にはないようです。ところでキツネは、世界的に昔ばなしの中で、用心深く悪知恵の働くイメージで描かれることが多いそう。一方カラスは、日本の「八咫のカラス」など、神秘的な鳥として描かれ、西洋でも、人の運命を告げる鳥として描かれるそうです。現代は特に都市部でカラスは迷惑者ですが、昔は一目置かれることがあったようですね。

### ●キツネは、イメージ通りの動物なの？

実際のキツネも、昔ばなしのような生き物なのでしょう？まず、用心深く警戒心が強い動物というのは、本当です。人間が巧妙に仕掛けた罠でも、ほんの少しのニオイで見破ってしまいます。また、聴覚はイヌ以上に鋭いと考えられ、目も良くて500m先にも発見されてしまいます。記憶力もよく、石を投げつけてきた人間、逆にエサをくれた人間のことを覚えているそうです。キツネの主食は、野ネズミなどの小動物ですが、その狩りの方法も舌をまく頭脳プレー。例えば、捕まえてにくい野ウサギに対して、奇妙なダンスを踊っ

て興味を誘い、近づいてきたところを一気に跳びかかる方法。あるいは、タヌキ寝入りならぬ、キツネ寝入り。寝たふりをして、近づいてきた獲物に跳びかかるのだとか。なんとこの方法で、カラスが襲われることも。やはりキツネは昔の人が考えたイメージに近い能力を持っているようです。

### ●キツネやカラスと人間の知恵比べ。

キツネは、日本だけでなく中国やヨーロッパでも美女に化けて人をたぶらかすとされているそうです。また、アイルランドには、キツネの結婚の日には晴れでも雨が降るという「キツネの嫁入り」に似た民間伝承なども。様々な言い伝えが残っているのは、それだけキツネが身近な動物だったからです。今では人里近くでキツネはめったに見られませんが、数は減り続けているのでしょうか？実は本州に生息するホンドキツネの頭数は少しずつ回復してきているそうです。昔ほど強力な農薬を使わなくなったこともあり、昆虫、それを食べる野ネズミ、そしてそれを獲物にするキツネの食物連鎖が回復してきているのが理由の一つ。しかし、その一方で北海道では、キタキツネが媒介する感染症が、いまだに大きな問題となっています。自然とのバランスを保つのは難しいことですが、あえてそれを考えられるのが、キツネやカラスに勝る人間の知能の真価かもしれませんね。

昔ばなし監修／昔ばなし研究所所長 小澤俊夫  
取材協力／日本動物科学研究所 今泉忠明